

会 議 要 録

会 議 の 名 称	令和元年度酒田市文化芸術推進審議会(第2回)
開 催 日 時	令和元年9月15日(日) 午後2時 ～ 午後4時
場 所	酒田市総合文化センター412号室
出 席 者	<p>○出席委員</p> <p>中川 幾郎 会長、熊倉 純子 委員、工藤 幸治 委員、上松 由美子 委員 田中 章夫 委員、阿部 直善 委員、加藤 聡 委員、加藤 真知子 委員 白旗 定幸 委員、市原 多朗 委員</p> <p>○欠席委員</p> <p>なし</p> <p>○事務局</p> <p>村上教育長、本間教育次長 (社会教育文化課)</p> <p>阿部課長、遠田課長補佐、小松補佐兼係長、佐々木主査、土門主査、小野主査兼係長、 中里調整主任、菊池主事</p>

1. 開会(事務局)

2. 会長挨拶

前回お会いしてからさほど日は経っていないような気はするが、久しぶりで懐かしい気持ちだ。その間、私も全国各地に派遣されて話をしてきたりしたが、勉強する場面がいくつかあった。その1つは、教育委員会所管の文部科学省の友人から聞いた来年社会教育主事の制度が変わることだ。社会教育士というものに変わって、地域コミュニティの現状調査とか計画企画の立案に力を発揮し、なおかつ解決のための助言・提案ができるような人間になってもらいたいという指針がでるようだが、それは全国で広がっていて、地域コミュニティの地域担当職員とそっくりだということで、国もだいたい問題意識が変わってきたと感じた。

もう1つすごいと思ったのは、厚生労働省と文部科学省が共通所管の障がい者の芸術活動の促進法だ。これに基づく地方計画というか、障がい者の芸術文化活動の促進計画を地方で作ってくださいということが国の要望となっている。ただしこれは義務事項ではなく、任意事項であるため、作る自治体と作らない自治体とに分かれてくる。そこで、厚労省では、私が滋賀県の文化審議会の会長であることを非常に意識していて、滋賀県は障がい者の文化芸術活動に関しては非常に先進的な県であると思ったのか、県内の自治体において、障がい者の芸術文化活動の促進計画を作るように、働きかけてもらえないかという依頼があった。酒田でも、そういう計画を作ってもらえたら嬉しい。これは福祉関係の課が所管でも文化関係の課が所管でもよく、定めは無い。

なお、今度新潟で全国の国民文化祭があるが、そこで障がい者の文化芸術活動促進の計画の作り方あり方について講師として話して欲しいと依頼があった。しかし、いまだにどんな計画をつくったら納得してもらえるのか頭の中でまだ定まっていない。いろんな知恵をみなさんからいただけたら嬉しい。これは今回の主要議題ではないので忌憚なく意見をいただきたい。

3. 協議

本日は欠席者なしのため、酒田市文化芸術推進審議会規則第3条第2項の規定により、会議が有効であ

ることを報告する。

(1) 推進体制に関する評価について

事務局

それでは、平成31年4月からの推進体制に関する評価について説明する。条例及び計画ができたことに伴い、文化芸術全般の推進を図るため、希望ホール自主事業企画運営委員会及び酒田希望音楽祭実行委員会を解散し、新たに文化芸術推進プロジェクト会議を立ち上げている。また、市民から意見を聴く場として、文化芸術によるまちづくり市民ワークショップを開催した。文化芸術の施策の推進にあたっては、行政、文化芸術推進プロジェクト会議、文化芸術によるまちづくり市民ワークショップ、三つの体制で行っている。

行政というのは、酒田市教育委員会社会教育文化課文化芸術係になる。職員が6名、文化芸術推進員が1名合わせて7名になる。業務としては、酒田市民会館「希望ホール」の施設管理、酒田市民芸術祭、阿部次郎・庄内文化賞顕彰事業、土門拳文化賞顕彰事業、年間パンフレットにあるソフト事業を中心とした文化芸術推進事業、酒田美術館・土門拳記念館施設管理事業、その他文化芸術にかかる業務全般である。成果として、人員が1名増加し、条例と計画に基づいた新しい事業に取り組むことが出来たと考えている。しかし、課題も3つあり、1つ目は職員の経験値のばらつきである。これに対しては、文化芸術、劇場、デザインに関する研修を充実させる等、一人ひとりのレベルアップを図っていく必要がある。2つ目は、職員の経験値に対して業務量が多く、じっくり取り組む余裕が無いことである。これについては、計画に基づき、集中すべき事業を決める等の見直しが必要と考えている。3つ目は、文化行政の経験値が低いため事業が円滑に進まないことである。これについては、協働パートナーも含め、引き続き推進体制の強化を図る必要がある。以上が行政に関する評価である。

次に、市民との協働による「文化芸術推進プロジェクト会議」について説明する。

初めに企画運営部会について、メンバーは、酒田市芸術文化協会会長ほか市内文化施設等の館長である。事業計画や予算の承認をしていただく意思決定機関として機能しており、今年度は1回開催している。課題としては、事業実施に際し、文化芸術推進プロジェクト会議で実施する各事業のPRやチケットの販売、協力に関する事等の共通理解が図られていないことが挙げられる。今後は事業に対する関心を高め、協力体制を構築することが出来るよう、事業の進捗状況の報告や事業内容について情報発信する等、情報の共有化を図る必要がある。

次に、作業部会について、メンバーは、学校関係者、学芸員、写真関係者、音楽関係者、演劇関係者、文化施設職員、まちづくり関係者、国際交流関係に精通した市民等、20～50代の市民で構成されている。月1回程度開催しており、次年度の事業について検討している。成果としては、これまで意見を聴く機会が少なかった市民の参画が図られること、他分野とのコラボレーション等新しい可能性を模索する協議が行われていること、各分野の課題を共有出来るため、事業のみならず研修に対する要望等、現状把握がしやすくなったこと、文化芸術の意義を考えるための議論がしやすくなったことが挙げられる。課題としては、それぞれの分野については精通しておりアイデアが出るものの、他分野とコラボレーションさせながら1つの企画にまとめることは難しいように見受けられた。共通した理解と熟度をあげるために、研修の充実を図る必要があると考えている。

続いて、文化芸術サポーターについて、メンバーは高校生を含め11名である。文化芸術推進プロジェクト会議主催事業及び共催事業等のDM発送作業、事業当日の運営等、事業に協力をいただいている。成果として1つ目は、広報やSNS等で募集したところ、高校生から70代まで幅広い年代の市民が参加し、事業の際にスタッフとして活躍していること。2つ目は、市民がスタッフとして文化芸術活動に参加し、体験することで、

計画に基づいて実施されている事業の意義を共に学ぶ機会になっていること。3つ目は、事業の広報等について、新しい層の協力が得られていることが挙げられる。課題としては、初心者がほとんどであるため、ホールスタッフとして十分な対応が出来ない時があることである。これについては、研修を重ね、スキルアップを図る必要があると考えている。2つ目は、目標人数に達していないことである。これについては、引き続き募集し、ホールスタッフの魅力や楽しさを伝えられるような広報の仕方を考えると共に、一層分かりやすく説得力がある説明が出来るよう努めていく必要がある。

最後に文化芸術によるまちづくり市民ワークショップについて説明する。参加者は、酒田市広報等で募集して申し込みのあった市民20名。6月15日、宮城県にあるえずこホールの前館長である水戸雅彦氏による講演会及びワークショップを実施した。成果は、「文化芸術に参加しやすい街とは？」と題し、高校生から70代まで幅広い年代の参加者が文化芸術活動について学び考える機会になったことである。2つ目は、参加した高校生の1人がこのワークショップをきっかけに、自分が活動している演劇に関するパンフレットを自主的に作成し、各所に配布活動を行っていることである。3つ目は、若い年代の参加者も多く、活発な意見交換により参加者自身の文化芸術活動を見直すきっかけになったとの感想が多く寄せられたことである。4つ目は、4つの事業提案があったことから、来年度事業の組み立ての参考に出来たことである。課題としては、1回だけの開催のため、意欲ある市民の思いを十分に企画に反映することが出来ないことである。これについては、数回に分けて継続的に実施し、議論を重ねていくことで、参加者の理解を深め、より活発な意見を出していく必要がある。

会長

これから自由に意見を願います。

委員

前回はかなり膨大な資料をいただいたが、コンパクトになって分かりやすくなった印象。前回も思ったが、全体として、行政の方は非常に一生懸命に取り組んでいるが、市民あるいはサポーター、市民ワークショップ等の参加者は少ない。まずこういうところに力を入れて欲しい。当日参加できなくなる場合もあるし、継続して事業を進めていくにはある程度の参加者が必要。市民ワークショップは2,3回しなければ育っていかないだろう。若い人が多く、活発な意見交換が行われたということはとても大事なことが芽吹いていることなので、育てていくような形で取り上げていただきたい。それに加えて、行政の職員は勉強しながら経験値をあげて行く必要があるのは当然であるし、これからじっくり取り組んでいただきたい。メンバーも1人増えたということだが、これだけの事業をこなすには全く職員が足りない。非常に負担が大きくなっているのではないか。自分も参加している企画運営部会はまだ1回しか開催していないが、まだまだ考え方の把握、企画運営部会の持っていく方が私の頭の中でもはっきりしていない。企画部会の参加者が審議会のメンバーでも良いのか気になる。

委員

前回より随分まとまっていて良い。行政に関していえば、頑張ってくださいしかない。サポーターが集まらないことに関して、企画運営部会のオブザーバーとして作業部会の方が参加するとか、作業部会にサポーターがオブザーバーとして参加すれば、上部の機関がどういう意図で決定しているのかが把握出来参加しやすくなるかと思う。それならやってみようという人もいて、サポーターも増えていくかと思う。

市民ワークショップについて、1回のみ開催は良くない。先ほど、行政、プロジェクト会議と市民ワークショップの3つの体制であり、プロジェクト会議と市民ワークショップは別物とされているが、プロジェクト会議の1つとして市民ワークショップを開催すればもっと分かりやすくなると思う。

作業部会の中で他分野とコラボして企画を考えていくことが難しいと書いてあるが、何でも良いから協働で何か企画し実施すれば、そこから何か生まれてくる気もする。

委員

行政の方の課題3つに経験値と出てくると本当にどうしたらいいのかと思ってしまうが、初めから精通している人はいないのでこういう課題があるのが普通。その上それぞれに研修せよと言っても経験値に対して業務量が多すぎてじっくり取り組めないとなると、どうやって解決していけばいいのかと案じられる。提案のひとつであるが、市民ワークショップを今後も開催するならば担当者も参加した方が良い。一緒に意見交換することで市民の考えを吸収したり、自分たちの業務と照らし合わせながら頭の中でコラボレーションさせたりして次第に分かっていくのではないかと。頭の中だけで考えて経験値を上げようとしてもなかなか難しい。生の声を聴く中で、共に考え、色々ヒントをもらったり出来る。文化行政担当者だから何でも知っているのだと大上段に振りかざすのではなく、共に足元から考えていこうよという姿勢で、一緒にやる人たち(ワークショップ参加者、サポーター、作業部会等)に接していけば、それぞれの力量が上がっていくと思う。

作業部会は20～50代までで構成されており、今までとは違った斬新な意見が期待出来る。出来るだけ意見を吸収し反映して積み上げていけば、参加者もやりがいが出てくるし行政にとっても良いことだと思う。

委員

全体として4点申し上げたい。1点目は、今回はPDCA手法の自己評価を、今回自主体制に対する評価もやっていることを評価したい。このことが市役所全体で実施されていけば良いが、どこもやっていないのではないと思う。社会教育文化課が積極的に実施しているのは良いが、なぜ市全体に広がらないのかということも教育委員会として考えなくてはならないのではないかと。教育委員会主体で実施される講演会等が全体にどんな成果を生み出しているのか考える必要がある。

2点目は、作業部会やサポーターの中で、職員はどのような役割を果たしているのか、特に作業部会メンバーは、それぞれの専門には精通しているけれども他分野とのコラボは難しいということだったが、コラボする役割という点で職員なり、推進員の方がどういう役割を果たそうとしているのか。

3点目は、サポーターについて、高校生からもっと参加して欲しいならば、直接、文化芸術に関する部活の先生と面談した方が良い。

4点目、ワークショップでは、「文化芸術に参加しやすい街とは？」と投げかけると同時に、市の考えを発信することも必要だ。そうでないとワークショップの協働というのが進まないのではないかと。ワークショップの進め方について、まち課で養成している地域共創コーディネーターのファシリテーション力を活用していくことも考えられる。検討が進められている提案型の協働型事業ということで市民や行政から提案がある。そのような場合、ワークショップから何か投げかけるということもあったかと思うところ。

委員

課題のところでも2つほど申し上げる。

職員の方の経験値と業務量については、職員の方は何年かごとに変わるわけだから、一定の経験値が出来たら変わるということを繰り返すことになり、このままずっと課題として持ち続けて解決にならないということになる。文化芸術係の方は10年15年変わらないという体制を作っていただけならいいが、そうも行かないならば、経験値が無くても出来る仕事にしなければいけない。そういった方法にしないとこの課題はなくなる。ここは根本的に考え方を直さなければならない。

企画運営部会の課題について、この企画運営部会というのは意思決定機関であり予算を決めたりするにもかかわらず、実働部隊のことを知らないで意思決定されるのは困る。実働部隊への理解を深めることで組織が始まるのではないかと。

委員

分かりやすくまとめていただいた。手ごたえはあるが、この手ごたえが手ごたえだけで終わってしまわない

かという懸念が伝わってとても分かりやすかった。まずは、今まで見たことのなかった高校生からシニア世代までの方が出てくれたので、制度改革は明確に手ごたえがあったと評価すべきだと思う。様々な意見があり、それを事業としてまとめあげるのが大変だということだったが、専門的なノウハウがあるとスムーズなので、もう少し責任ある立場でまとめあげていくような人が、来年、再来年度くらいにはいて欲しい。

ワークショップに関して質問だが、市民ワークショップの応募者20名とサポーターの11名は重複している人がいるのか？(事務局:3~4名は重複している。)良いバランスだと思う。サポーターは割りと敷居を低く、ホールの接客業務のような誰でも出来そうなところが入り口になっているが、そのうち3分の1くらいの方がもう少し欲を持ち、この市民ワークショップに出て、単にもぎりの手伝いだけでなくもっと積極的な、文化による街づくりに自分も関わりたいという色気が徐々に出てきている。そういった人取り入れていった方が良いと思う。

さきほど委員の意見で、ノウハウが無いのであれば、ワークショップで一緒に勉強すれば良いというのはその通りである。さすがに企画運営部会はそれぞれ立場のある方々の集まりなので難しいと思うが、行政の方々また作業部会、サポーターそして偶然チラシを見て参加した市民の方々という市民ワークショップが、横串を貫くような機会になってくれて、私たちが良く分からないんだということを、審議会と共有しつつ協働していくという機運がでてくると良いと思う。

もう1点は課題についてだが、他の先進事例の試みで、いわゆる行政職とは違う特別職を設けて、多少は専門性があるフットワークが軽い、学校に向いて先生と実際に会って、何か一緒にやりませんかという手間をかけられるような専門職員が入れられるとだいぶ良いと思う。しかし、責任もあり費用もかかるため、異動のある行政職員の性格上蓄積しにくい経験値をどこに蓄積していくのかということ、通常そのために財団という組織がある。ただし、その組織の見直しと活用を頑張ってもらい、専門的なノウハウが長年蓄積していく場として財団を位置づけられるかどうか。失敗例もあるので難しい。そうすると、財団の各館のそれぞれのコンテンツの専門家ばかり集まっているなかでももう少し横に繋げていくこと、他者と連携、全然違う分野と連携していくような、コーディネート能力のある人が少なくとも財団側には必要ではないかと思う。

委員

今年度企画運営部会の会長に推薦されて、事業を成功させるためにどうすればいいかという提案・テーマが事業ごとにあった。例えばサポーターが高校生を除くと8名という状況でこの原因は何なのかとか、社会教育文化課では何を課題としているのか。私は社会教育文化課に足を運んで、チケットの販売状況や誰にどう頼んでいるのか等、きめ細かく情報収集しながら対応してきた。しかし、職員は課題の通り初めてでわからなかったり、別の仕事に日々追われていたり、年間の事業紹介パンフレットは、既に3つ4つ終わっているような時期に市民の皆さんの家庭に配布されたりと、事業に対する遅れは否めない。解決するには社会教育文化課や企画運営部会で業務内容を明確にする必要がある。企画運営部会は1回しか開催していないが、鑑賞者が増えるようにチケット販売等に協力してきたし今後も続けていく。事業案内は可能な限り早くすること。作業部会は5、6回やってかなり前向きな姿勢があるが、それぞれの担当部会の職責を徹底研修して自覚していく必要がある。特に作業部会の場合、音楽・美術の現役の先生が多忙な中頑張って参加してくれている一方で、美術館関係は忙しくて出られないあるいは上司が許可してくれないという話を聞いた。人選に問題があったかどうかということ。審議会にしても、作業部会にしてもその道に情熱を持って会議にも参加してくれる人選を今後十分に考えやっていくべきだろうし、これからでも任命して協力してもらおうということも大事なのではないかと思っている。

社会教育文化課の職員は一生懸命やっていると思うが、上手く歯車が回るように管理職も管理しなければならないし、特にこの職員になって年数が少ない人を上手くりードしていくように心がけなければならない。

委員

今年実施した市原多朗マスタークラスでは、ロシアのジェレズノゴルスクイリムスキー市から少女たちや市長さん、コーラス指導者、伴奏者の女性が来てくれたが、担当課は交流観光課だった。そうすると社会教育文化課で把握しているプロジェクトの進み方と交流観光課が思っているイメージにズレがあり、間を埋めるのに四苦八苦したが、結果好評であったようで、両課のご尽力に深く感謝している。他課との人の入れ替えでまたゼロから作ることになるのが残念なので、社会教育文化課の方々にはぜひこの仕事に長く携わって欲しい。そして他課の管理職の方々にも、市長が折に触れ、文化芸術推進プロジェクトの意義を徹底的に伝えることも必要だと思う。

一方、学校の先生方にも、文化芸術の推進が世の中にとって、人が生きていく上でどれだけ価値があることかを理解していただくよう、先生、校長先生に社会教育文化課からアプローチしていただくことを望んでいる。今大変良い形で進んでいる、市民ワークショップ等の裾野からの立ち上げと共に、親や先生から子供たちに文化の大切さを伝えることもとても大切だと思う。市民への直接のアプローチと共に、学校や役所の各課の管理職等に、文化が社会的に有益だということをよく認識していただくよう、社会教育文化課の方々の働きかけをお願いしたい。

そのためには対話も必要で、せつかくここまで進んできているので、社会教育文化課内でも様々な情報交換も密にして常に共通認識を持ち、ディスカッションして様々な壁を取り去り、より良い方向へ進めていくようお願いしたい。

委員

学校サイドとして責任を感じながら聞いていた。年間の教育課程が前年の2月くらいにはある程度固まる。予算の関係もあって難しいとは思いますが、来年度の事業予定を早く学校サイドに投げかけていただけるとまた違ってくるのではないかなと思う。4月の校長会で事業が提示され、希望の方は1ヶ月以内に提出してくださいと言われても、学校は春先とても忙しい時期なので難しい。前期、後期に分けて希望を募るといった配慮をいただけるとありがたい。

行政職員について、長く所属できればベストだが各専門の方々がいるのだから、その方々を上手く活かし全部自分が知っていなくても担当者とのやり取りを深くすることによって改善するのではないかなと思う。また、文化芸術でどんな街にしたいかは、具体的に何をしてどんな動きが出れば良しとするのか、音楽・美術等各分野での目指す姿をみんなが共通理解すべき。その上で、行政、プロジェクト会議、市民ワークショップの方々が意見を出し合い、どのようにそれを繋げて何を目指していくのかを、言葉だけでなく可視化して共有できる方法があれば良いと思う。

(2) 事業評価について

事務局

酒田市文化芸術推進計画基本的施策に対する事業評価ということで、平成30年4月～令和元年8月までの49事業を対象に評価を行った。1年半で実施した事業については、前回の審議会で示したが、計画にある20項目の基本的施策のうち、特に効果があった事業ということで内部で評価を行ったものである。文化芸術係単独で出来る事業については充実したが、他課との連携が必要な事業については、事業数が低い結果になってしまった。

人づくりに効果のある市民文化政策、まちづくりに効果がある都市文化政策という2つの政策ごとに評価を行った。

初めに市民文化政策について報告する。市民文化政策は、社会包摂と育成という方針のもと、事業を実施

している。

社会包摂という視点に基づいて実施した事業の成果は、幅広い年代の市民に対し、事業を実施することが出来たこと。希望ホール等の文化施設に足を運ぶ機会の少ない市民に対し、デイサービスでのコンサートを実施するなど、文化芸術に触れる機会を提供出来たこと。酒田では初めて障がい者アート展を開催することが出来、障がい者が作品を出展したり鑑賞したりすることで、社会参加の機会を提供することが出来たこと。ランチタイムコンサートや街かどコンサートを開催し、誰でも気軽に文化芸術に触れる機会を提供出来たことである。

次に、育成という視点に基づき実施した事業の成果について報告する。ヒビカルによる松山保育園の園児を対象にしたコンサート、山形交響楽団プロ奏者等による楽器クリニック、東京藝術大学教授による小学生を対象にしたワークショップ、ミュージカル体験ワークショップ、更にプロの音楽家の育成並びに市民の育成を目的とした酒田オリジナル 市原多朗マスターコース事業など、鑑賞事業、体験型事業を実施しプロのアーティストに学ぶ機会を提供することで、未就学児から高校生まで幅広い年代の子どもたちのモチベーションアップに繋がったと評価できる(アンケート結果より)。また、プロの指揮者による中学生への合唱指導では課題を抱えた生徒が指揮者との交流によって前向きに取り組むきっかけになったという報告があった。一般財団法人地域創造の助成を受け実施したダンス事業では、経験値の高いプロの舞踏家が高校演劇部を対象にワークショップを実施し、舞踏を通じた表現について学ぶ機会を提供することが出来た。

最後に、その他の事業について報告する。条例・計画を策定したことにより、多様な文化芸術に触れる機会として、アートマルシェを開催した。「五感で楽しむ」をコンセプトに文化体験が出来る場を提供したことは、日頃希望ホールに足を運ぶ機会の少ない市民が、ホールを訪れる動機付けにつながった。

以上が成果であり、次に課題を報告する。

1つ目の課題は、地域に偏りがあったことである。方向性としては、松山・平田・八幡地区など、各地区の支所やコミュニティセンター等と連携し、幅広い年代を対象にした事業を実施していく必要があると考えている。

2つ目は、基本的施策にある「誰もが文化芸術に親しむことが出来る文化的環境の整備」に関する事業が多様化し育成の対象が広がったが、成果には至っていないこと。方向性として、育成については今後も継続的な取り組みが必要であると考えている。

3つ目は、社会包摂という視点は条例と計画が出来たことによって、事業へ反映されるようになったものであるため、試行錯誤しながら展開している状況であり、まだまだ十分とは言いがたい状況であること。方向性として、社会包摂の目的を達成するために、協力していただく協働パートナーについて検討する必要があると考えている。

4つ目は、社会包摂については、障がい者に限定した事業を実施していること。方向性としては、社会包摂を方針とした事業の対象、手法についても今後十分な検討を重ね、より多くの市民が参加できるような展開を目指す必要があると考えている。

5つ目は、文化芸術は趣味趣向の側面が強い傾向にあり、理解者が多くない状況であること。方向性としては、より戦略的に計画し実行していくために、地域と行政を繋ぐ専門人材の確保について検討する必要があると考えている。

以上が市民文化政策に関する評価であり、次に都市文化政策について報告する。都市文化政策については社会包摂と育成という視点では行っていないため削除している。

初めに成果について報告する。社会包摂を目的とする事業の実施にあたっては、事業の表示や雰囲気など、障がいのある方も楽しめるような環境整備に努められたこと。デザインに関する研修会など、文化芸術によるまちづくりに関する視点を学ぶための意義のある研修会を実施出来たこと。条例・計画を策定したことに

より、多様な文化芸術に触れる機会としてアートマルシェを開催し、「五感で楽しむ」をコンセプトに文化体験が出来る場を提供出来、日頃希望ホールに足を運ぶ機会の少ない市民がホールを訪れる動機付けに繋がることが出来たこと。酒田オリジナル事業である市原多朗マスターコースで、酒田名誉市民の市原多朗氏がプロに対して指導する様子を公開するとともに、コンサートを開催することで、酒田市の音楽事業に対する取り組みを全国に発信することが出来たこと。広報を強化するために、コンセプトをデザインし発信力のある広報物を作ることが出来るよう、若手デザイナーと一緒に広報物の作成に取り組めたこと。これは若手デザイナーの育成という意味でも成果があったと考えている。

次に課題について報告する。

1つ目は、市役所内部の連携を必要とする都市文化政策を目的とする事業が少ない状況であること。方向性としては、市役所内部での連携を図ることで、課題とした施策の充実が期待出来ると考えている。社会的基盤となる人材育成を目的とする市民文化政策に加え、他の部署と連携することにより、まちづくりとしての効果が期待出来る場合には、連携を図るような展開を検討すべきではないかと考えている。

2つ目は、市民との連携が少ない状況であること。都市文化政策は、特にまちづくりに効果が期待出来るため、専門性を持つ市民や企業などの多様な連携を図ることも視野に入れた検討が必要だと考えている。

3つ目は、専門性を持つ人材が少ないため、広報が弱い状況であること。選択的、集中的に行うべき都市文化政策の実施にあたっては、デザインやマネジメントなどの分野についても研修を重ね、ビジョンを持った戦略的な取り組みが求められる。方向性としては、今後、研修内容も含めた人材育成、人材確保について検討を進めていきたいと考えている。

以上が都市文化政策に関する評価である。

会長

自由に意見をお願いします。

委員

まず、第一に市民文化政策に関して成果と課題をお示しいただいたが、当然の結果がでていると思う。私も今まで行われた催しに出て、課題1の地域に隔たりがあることを実感した。旧三町や高齢者が多い地域の方が、旧市内まで足を運んでくれるかという難しい。全体を通じて公正というところが欠けているような嫌いは否めないため、旧三町でも催しをするべきだと思う。

また、社会包摂について、障がい者に限定している事業をやっているということがあったが、第一に実施したことには大変意義があることだと思う。ただし、実施するだけでなく、開催地を巡回させる等、障がいがない方も含めより多くの方が参画しやすいような工夫やPRが必要だと思う。

都市文化政策について、様々な事業に参加してみたが、市役所の行政の内部や市民と協力するということがまだまだ弱く、全体としてのまとまりが不十分だと感じた。まだ高齢者中心のイベントが多く、もう少し敷居が低く、若者が楽しめる事業が必要だと思う。市民との連携が最も大事でありもっと考えていかなければと実感した。

委員

多様な交流を生み出す湊町文化の創造とその基に市民文化政策と都市文化政策がある。文化というのは、継続性の上に成り立っていると思うし、「継続しなければならぬ」と実感することで酒田の湊町文化というのが創造されるのではないかなと思う。たとえば両方に共通しているアートマルシェは、子どもからお年寄りまで参加しており継続していくべき事業だと感じた。

市原多朗マスターコースでの市原氏が指導している姿を若い参加者に公開するのは刺激的で継続すべき事業だと思う。

また、私は世界の都市を訪れるときは、建築家としてヘリテージアーキテクチャーのプレートが付いた歴史的価値のある建物を意識するようにしているが、他部署との連携が出来ないという件について、例えば酒田にある建築や土木構造物等が湊町文化に適する価値ある構築物なのかを都市デザイン課・土木課など他の部署の方々と一緒に議論し、価値ある構築物にはヘリテージアーキテクチャーを示すプレートを着けて顕彰してはどうか。酒田市として顕彰していけば、もう少し市役所の中でもデザインや都市文化をあまり意識しない課の方々も意識するのではないかと思う。市民はもとより酒田を訪れる旅行者の目にも止まり、湊町酒田を理解する一助になるのではないか。

委員

初めに人づくりの社会包摂のところ、育成の対象が広がったが成果には至っていないとあるが、今まであまり意識してこなかった点を意識して実施し、対象の広がりが見られたということはとても大きい成果になると感じている。

2つ目の育成のところの課題5について、文化芸術は趣味趣向の側面が強い傾向にありと書いてあるが、文化芸術をどういう風にとらえるのか。芸術評論家が求めるところを言っているのか。私は単純に綺麗なものを見たら綺麗だと思うなど、五感で感じる事が出発点だと思う。だから、趣味趣向の強い傾向にありとなると、評論家向けの、趣味趣向が強い人向けのことを取り立てて計画することになるのではないか。誰もが持っている、美しいものを美しいな、良いものを良いなと感じることから次第に自ら探求したり工夫したりする広がり生まれると思うため、あまりハードルを高くしなくても良いと思う。〇〇大学に入学したい・させたい、文化芸術の専門家を育てたいということではなく、日常において、素直に感じ取る心や感覚を大事に私は子どもたちを育てて行きたい。あまりハードル高くすると、より素晴らしい成果を求めすぎて次第に自分で自分の首を絞めていくことに繋がってしまうのではないか。

委員

2つ申し上げる。1つは今の話題について。趣味趣向の側面が強いと思っている主語は誰なのか。そういうものではないというのがこの場での共通理解だと思うが、これでは市がそう思っているように見える。市はそう思っていないが市民がそう思っている場合にはそのように書いたほうが誤解がないと思う。

もう1つは、社会包摂の課題として障がい者に限定した事業になっているということもあったが、市役所全体の連携という点では評価が市役所内でいきわたってないから他部署との連携が無いのではないのかと思わざるを得ない。そこを教育委員会からどういう地位の職員の人が発信するのかという課題もあると思うが、もっと発信していかなければならないし、市も全体として受け止めなければならないのではないか。例えば、来年は2020年でオリンピック・パラリンピックに向けた事業を考えていると思う。障がい者差別解消条例も来年の4月施行のようだ。そういったことと合わせて様々な部署が連携し、ワークショップの中で議論されていくなど、ぜひ来年度の事業を考えるきっかけになって欲しいと思う。

委員

まず事業評価の表の見方だが、20項目に対して事業数が4とか35とか、二重丸が効果があった事業数という見方をするのだろうが、この事業を全部足すとオーバーになる。これは例えば1番の文化芸術活動を行う環境の整備とは49事業のうち4事業が二重丸だったという見方をするのか。オレンジ色の項目は全く評価されていないことになるという見方をすればよいのか。(事務局同意)

市民文化政策の一番最後の方向性のところについて、人材の確保について、具体的な施策があるのか、あるならばこれはぜひ進めていただきたい。都市文化政策については、課題の1に市役所内部の連携を必要とすると書いてあるが、都市文化というと都市デザイン課あたりと打合せしないと話が進まない気がするが、実際に都市デザイン課と打合せをしたのか。都市デザイン課では駅前には百何十億円かけて再開発する、産

業会館も出来る、小幡は2、3億円かけて直そうとしている。都市文化政策を落とし込める場所がものすごく目の前にあるのに手を出さないのはもったいない。駅前ほど真ん中に広場ができて、その隣に最新鋭の図書館が出来る。小幡は酒田の市民文化の発祥の地になっている。そこに今絡んでいかない手はないと思うが大変だろう。出来る限りのことを、裾野の広い事業として展開されると良いと思う。しかし、目の前の大きな事業があるためそこを忘れてはいけない。

委員

どこを熱心に取り組んでどこが薄かったのか、シンプルで分かりやすい。他の委員から素晴らしい鑑定が出て付け加えることは無いが、実現するならとてもドラスティックに頑張らないと、条例からビジョンから何から何まで絵に描いた餅で終わる可能性は無きにしも非ずだと思う。再開発は色々な利害関係が絡むので大変だが、先々のソフトやレガシーを含めてきちんとデザインしないと単なる負の遺産になるのはどこの自治体だって明らか。それを繰り返して滅亡を計ることは無いようにと思う。

また、湊町文化はカッコいいがそれが何なのかあまり見えてこない。市民がみんな湊町文化を考えなければいけないというものでもないが、この辺が浮き立って見えてくると魅力的だろうと期待している。

委員

市民文化政策の課題について、昨年度から今年度に事業を終了しての偽らざる自己評価というか行政としての考えで、私も同感だ。酒田市民が事業をサポートし、事業を成功させようとする意欲の形成が必要である。ある部門の反応・協力体制というのは、プロジェクト会議の会長として難儀したところがある。自主事業の解散が多くの難問題を抱えてしまったと思っている。文化芸術事業に皆関心を持ち、成功に向けサポートし合う体制づくりを早急に対応していくことが必要だと思う。

都市文化政策の自己評価にあたって、課題をしっかりと捉えられているので良いと思う。

委員

先ほどの、文化芸術は趣味趣向の面が強いとの見方は、どの立場の方々のものなのか明記してほしいとの発言について私も同意する。

そして、以下は1つの提案だが、東京都台東区は様々な文化を非常に大切にしている、至る所に観光プレートが設置してある。例えば寺町である谷中地区には観音寺の塀に築地塀という名称とその由来が書かれたプレートがはめ込まれていて、散歩や観光など多くの道行く人が歩きを止め一読することで、学習し塀の見え方も変わってくる。酒田でも一部にはプレート等あると思うが、街おこしの一環として、酒田にはこんなに良いものがあり、こんなに大切にしているということ、具体的にアピールすることをお勧めする。

委員

自分も参加した街かどコンサートは、天気が悪い日だったが、通りがかりの人にも声をかけていくうちに、最後には準備した椅子が足りなくなり追加するほど人が来ていた。こういう事業を定期的に、気軽に楽しめるような日常生活が繋がれてくると、いつもあそこに行くといろんなことを楽しめる、面白いことがあるということが確立され、市民に定着していくのではないかなと思う。音楽だけでなく視覚的だったり風鈴の音だったり、ちょっとしたアイデアが定期的にあの場所で提供できればと思う。

旧市内中心になりがちだとあったが、松山・平田・八幡の自然や建造物を活かしたアイデアや芸術活動があると旧町の方も一緒に楽しむことが出来るのではないかな。

教育という観点から、小中学校はもちろんだが、他課との連携の中で健康課や子育て支援課あたりでは親子で読み聞かせ等をやっている。そういうところを活かしながらちょっとダイナミックな遊びを何ヶ月検診の時に一緒に提供してみるとか、中町の交流ひろばや文化センターを活かしてそこに行くと思いきりビリビリ破いて遊べたりするのも良いと思う。親の意識を、勉強だけでなく体を使ったりいろんなことを体感しながら五感を

使って楽しむことに向けてことが次にプラスになっていくための下地になると思う。

会長

2つの議題について所見をいただいたが、それについてコメントをいただきたい。まず、大筋を整理する。第1の議題については大きく分けて、行政職員のあり方についてかなりご意見が出ている。特に人事異動で人が替わることだが、上手く研修のシステム等続けていき、例えば初任者研修、中級者研修、上級者研修くらいは必ず受けることで、職員の技術的なスキルの維持が可能なのではないかと思う。財団もその中に一緒に居続けて議論するべきであり、財団職員も行政職員と同様に供給元としてそういう視点に立つべきという意見があった。それから企画運営部会や作業部会、実行部隊やサポーターなどがあるが、それらが上手く繋がるように連携できる仕組みをもっと考えるべきではないかということ。お互いにオブザーバーで入ったりワークショップ参加者をどこかの部会に誘い込むのも方法だという話があった。それから、ワークショップと各部会との関係をつなげ、単にワークショップして啓発しているだけでなく、そこから人材を引っ張り出すという明確な戦略持つようにという意見もあった。

評価するということは非常に良いことで、行きつ戻りつ色々な試行錯誤はあるだろうが、やっていることは絶対に良いことだと支持いただいた。さらに、それを通してもっと市民との協働関係を深めていくべきで、新たな評価項目として追加すべきではないかという意見もあった。1番シャープな問題としては学校との連携だが、学校課においては2月には次年度の予定が決まってしまうので早く示して欲しい、予算が確定してしまっただけでは遅いため、構想段階でも学校行事として調整できるようにきちっと予算案を示してしまっただけの方が良いのではないかと、お互いの決定時期のズレを埋めたらどうかということだった。以上のことで第1の議題については大きくまとめられると思う。

第2の議題については事業評価そのものだが、事業評価のあり方についての批判はあまりなかった。それよりも事業評価を受けての課題とか、課題の認識の仕方に関して様々な意見があった。1つは育成の対象が広がったということで、むしろ成果じゃないのという意見もあったが、育成の対象が広がったという言葉自体が良くわからないため答えていただきたい。また、趣味趣向について3名の方から発言があったが、誰が言っているのか、一般市民がこう受け止めているのか、行政の内部で趣味趣向の世界だといっているのかという疑問があった。一般論として昔はよく言っていたが、文化計画が出来てからは芸術とか文化は趣味趣向の世界ではないと理解しているはずだ。それから、内部の連携については広げていくことがまさしく課題、決まった主題であると理解したほうが良い。それから、都市文化政策との関連だが、都市文化政策は都市政策だということも明言しているため、観光振興とか伝統文化に立脚した産業開発には当然連携しなければならないはずだ。それ以外に都市再開発とアーバンデザインも連携の対象なので、関係ないという話は全く認められない。むしろなぜ連携しなかったのか、どれくらい連携を深めてきたのかの実績報告が欲しい。駅前再開発や図書館行政も関係する。どういう図書館作るのかまでは報告しなくても良いが、そこにどれくらいリンケージを働きかけているのかくらいは報告して欲しい。社会教育文化課にとっては味方をつくるための大きなチャンスではないかと思う。文化計画があるんだぞと行政内部にも示すことが出来る。そういう点では本庁の部局とも連携するので、一定程度の段階で、観光振興や都市再開発のあいさつ文等で市長の言葉として「文化基本計画に書かれていますように～」と宣伝してもらおう等の仕掛けも必要だと思う。それから、私自身がなるほどと思ったことだが、旧市内が中心になっているということは反省がいるのではないかと。アウトリーチをする事業をいつその地域に持ち込んでいくのか、あるいはインリーチする仕組みがあるのか等考える必要がある。今後、考えを深めて欲しいし、記述として具体化して欲しい。やはり地域偏差があるという課題で止めるのではなく、次の時点ではどのようにクリアしていこうとしているのかを書く必要がある。それから、教育現場にいる委員のお話でなるほどと思ったが、1歳半、3歳児、5歳児検診等の定期健診で、その会場で親子の遊びの中にアートを取

り入れるというのはアートスタート事業に近い。こういう風に関わっているよというのが見える場所が欲しい。ブックスタートを芸術でスタートするともっと意味があることだと思うので考えていただければと思う。

事務局

ご意見いただき感謝している。まず、専門性に関しては行政の職員として全ての職員が出来るわけではないことは理解しており、研修等に参加してスキルアップする必要があると考えている。また、協働パートナーとして外部に専門性を求めるというのは非常に大事ではないかと考えているし、委員からあった、財団の見直しや活用についても視野に入れて考えて行きたいと思う。

市民との連携の部分については、作業部会、市民ワークショップ等、ようやくスタートできた段階かと思っている。これから更に、それぞれではなく一緒に繋がりを持たせられる形に持っていければと思う。

それから、内部連携について、本当に課題である。都市デザインの話が出てきているが、実は社会教育文化課の庁内での1番の理解者は都市デザイン課になっている。一緒にやろうと今色々相談しているところで、駅前については高校生と東北芸術工科大学の先生を入れてシャッターアートや色々な仕掛けをしていこうと都市デザイン課が動いている。それについて、文化芸術係も入って一緒に進めようとしている。ただ、残念ながら、観光や福祉とは自分たちの事業をやるのが精一杯で連携していく余裕が無いというのが現状。そこで止まらず引き続き我々から仕掛けていく必要があると思っている。

あとは継続性だが、私たちの事業はすぐに成果が出るものではないため、小さな事業ではあるがランチタイムコンサート等、継続していくことが大事だと考えている。そういうことで、条例・計画を作って力を入れて行きたいと考えている。

趣味趣向の話だが、実はやはり市役所内部でも文化芸術は趣味趣向の世界じゃないかという声は多い。一部の職員からはお金が無いのだから、市民会館は閉館しても良いのではと言われることもある。そういった意識を変えていくのも大事で、先ほどその具体的なイメージをとあったので、我々が目指す姿を様々な場面で示していくことが大事だと再確認した。育成の拡がりの部分に関しては、保育園から施設のおじいちゃんおばあちゃんまで、それから障がい者の方々まで拡がりが出てきたということで書かせていただいた。

会長

以上で2つに議題の審議が終了した。今日いただいたご意見はそれぞれ記録させていただいているので、それをもとに次回の答申案に反映させていくということで作業していただきたいと思うがそのような手順で良いか。(※一同賛成)

それではそのようにお願いします。以上で今回の審議会を終了して事務局にお返しするが、発言したいことが残っていたという委員はいないか。委員の話を省略しすぎたので少し言葉を追加したい。社会包摂について指摘があったが、障がい者だけという言葉だけでは社会福祉は言い尽くせない。実はもっとたくさんの少数者はいて、低所得者とか一人暮らしの人とか、健康を害して入院している人とか、そういう人まで目を広げるべきなのではないかという話である。その辺の視野の広がりを忘れないようにしていただきたい。では、事務局にお返しする。

4. その他

(1) 今後のスケジュールについて

事務局

本日いただいたご意見を反映させ、会長と相談の上、答申(案)を次回の審議会でお出しさせていただきたい。答申の時期については、次回審議会終了後になるため、11月か12月の教育委員会の予定で進めさせていただきたい。教育委員会は傍聴も可能なので、傍聴希望の方は事務局にご連絡ください。次回の審議会の

開催は、11月を予定させていただく。改めてご案内するのでご出席いただきたい。

(2) 下半期の事業について

事務局

下半期の事業について、チラシを配布しているが、今週9月20日には、市原多朗先生のマスターコースに参加いただいたロシア出身のバリトン歌手ヴィタリ・ユシュマノフ氏によるリサイタルが開催される。これに伴って、コンサート前日の19日には午前中八幡小学校、午後酒田南高校でアウトリーチを予定している。その後の事業としては、若竹ミュージカルの屋根の上のヴァイオリン弾きと障がい者アート展が予定されており、これのプレイベントとして9月28日に若竹ミュージカルの皆さん12名ほどが来酒し、ドキュメンタリー映画の上映会を実施する。この映画を制作した金監督も加えトークショーをし、約2時間半のイベントになる。お時間あればご覧いただきたい。

それが終わると12月はいよいよ屋根の上のヴァイオリン弾きとアート展である。こちらが本チラシになるがまだ校正をしている段階でもう少し時間がかかる。再来週くらいにはPRを始める。9月7日からチケットを販売しており、障がい者と学生の方は無料とし招待券を出している。今回の屋根の上のヴァイオリン弾きは、酒田特別支援学校の高等部の皆さんからも出演していただき、若竹ミュージカルの皆さんとの共演が予定されている。10月の下旬に行われる特別支援学校の学校祭では、練習している屋根の上のヴァイオリン弾きの曲を披露されると聞いている。これが年内の事業である。

1月になると、今年の我々主催事業の大きなポピュラー系のコンサートでスキマスイッチがあり、その後、中川賢一先生による美術と音楽のコラボレーションの事業がある。これは各学校等に伺ってアウトリーチも行う予定。2月1日、2日にはアートマルシェがあり、今年度の事業は終了予定である。

委員

補足として、私が提案者である屋根の上のヴァイオリン弾きの引越公演について、皆様にあらかじめインフォメーションさせていただきたい。オーケストラは健常者の方々だが、舞台上ではダウン症や自閉症等の障がいがある方々が中心なので、プロのミュージカルグループの公演とは趣が全く違い、音程が独特な人あり、台詞が聞き取りにくい人あり、色々なハプニングも多々起きやすい。しかし、例えば字幕が出ることで内容はわかりやすく出来るし、そのまっすぐに音楽に向かっていく姿勢はとても心打たれるものがある、プロに合わない独特のエネルギーに満ちている。私は3度公演を見て、その都度号泣した。聴いてくださる皆様にもきっと響くと信じてこれを推薦させていただいた。

教育長

審議会で計画を評価しながら審議していくというのは、本当に極めて重要だと改めて思った。前回私は欠席だったが、今回私個人としては、教育委員会の主体性の問題があって、教育委員会はもっと主体性を持ってボールを投げないと審議していただけないという可能性を、正直に言えば危機感を持った。まず自己評価をやる。その評価なしに人から評価してもらおうという甘い考えではダメだろうというのが私の基本的な考え方である。成果は成果として別だが、テーマがあればそのテーマについてどれだけ頑張ったか、それを思いっきりこの審議会に投げようとしなければ、審議会のありがたみは分からない。誰か立派な先生が何か評価したって、いったい誰がその評価を受け取るんだと、まず我々が受け取る第一のキャッチャーでなければならないということ。新しい次長、課長、担当者の方々が本気になって投げたボールだったと私は思う。それで、本気で返していただいたなど。返される言葉が全部ヒットするような返し方だったので、コールドゲームだったと思うが、それが私にとって本当に感謝するところ。私はこの計画通りに行くのかどうかまだ全然自信が無い。はっきり言うと、そんな立派なことを言っても本当にやれるのかと自信がない。ただし、やる価値はしっかり

あると思っている。私たちももう1回ボールを投げるのでどこかでまた打ち返していただければと思う。
本日は貴重なご意見をいただき大変感謝している。

5. 閉会

【以上】